

2004年アムステルダムラ・アッシュ・インスティテュート卒業後、オランダのハルデルハイク生まれ。サンダーバード・インスティテュート修了。現在、アムステルダムと京都を拠点とする。作家が重視するのは、素材、グラフィック、技術、色彩の4つの要素であり、アーカイブ資料を現地の職人たちの仕方を細解することで制作が始まるという。元のきもの継い合わせをそのまま見せる線の歪みや、元の記憶の語りを素材に託し、多くも語らな色面構成をしている。

Born in Harderwijk, Netherlands. After graduating from Amsterdam Fashion Institute in 2004, completed her studies at the Sandberg Instituut. Currently, based in Amsterdam and Kyoto. The artist has stated that she focuses on the four key elements of material, graphics, technique, and color. Her works often begin by examining archival materials and the working practices of local craftspeople. The exhibited work employs traditional Japanese hemp fabric collected by Yoshida Shinichiro, which Engelgeer has reconfigured. The irregular lines that reveal the original kimono seams, together with new hues formed by overlapping fabric layers, imbue the material with a narrative of history and memory, producing a subtly restrained composition of color fields.

Mae ENGELGEER

E-1 Unintended #119
2024年
古大麻布、着合、紅花
70.8×80.6cm
個人蔵

E-2 Unintended #120
2024年
古大麻布、藍染
70.8×52.1cm
個人蔵

E-3 Unintended #121
2024年
古大麻布、藍染、鈍金
61.8×77.0cm
個人蔵

E-4 Unintended #127
2024年
古大麻布、藍染、紅花
92.0×49.7cm
個人蔵

E-1 Unintended #119
2024
old *taijia* hemp, turmeric dye, safflower dye
70.8×80.6cm
Private Collection

E-2 Unintended #120
2024
old *taijia* hemp, indigo dye
70.8×52.1cm
Private Collection

E-3 Unintended #121
2024
old *taijia* hemp, indigo dye, turmeric dye
61.8×77.0cm
Private Collection

E-4 Unintended #127
2024
old *taijia* hemp, indigo dye, safflower dye
92.0×49.7cm
Private Collection



早い段階からテキスタイルによる作品をとり上げてきました。継続的に取り組むのは、これまで紹介してきた作品が内包する表現の可能性と批評性を、今日的な状況を踏まえた上で再検証するためでもあります。

「テキスタイルの冒険—現代オランダの4人のアーティスト」において、レオ・ヘンリクセンの近作は、「ロナ禍で顕在化した不安定な日常を送る人々にとって、必要な連帯を摸索した作品です。サークルを描くように配置された半透明の袋状のモジュールは、人々の身体が互いに支え合うことで成り立つコニティを表わしています。本展では、ヘンリクセンの作品が提起する身体性行為そのものが象徴的な意味を持つテキスタイルの方法論について考えます。

布の身体性には、衣服として使用されるところから想起される身体と、制作の主体である身体というふたつのアプローチが指摘できます。さものは、一般的に模様が鑑賞対象とされますが、村山順子の作品は、その着用性によって毛皮を纏うイメージを喚起させます。かつてものだった大麻布を用いたメイ・エンゲルギールの作品や、田中千世子の「(織)」シリーズは、切断し再構成することで新たな文脈をつくります。一方、ひろいの「(織)」は、織物の工程で通常は隠される糸の結び目を、つって結んだ行為の痕跡として見せ、費やされた時間や労働の価値、もしくは結び直すという象徴的な関係性を示しています。こいつした関係性の射程を共同体へと広げ、アリ・バユアジは、紡ぎ、染め、織り直す「ロセス」によつて、「(織)」の再編を問うてゆきます。

作品の前で私たちが目ににするのは、たた結び目であり、繋ぎ接ぎであり、布の重なりにすぎないのかもしれません。しかし日常的に見慣れた眺めの奥にこそ、私たちを取り巻く社会への想像を広げるためのじぐさが隠されているのではないかでしょう。



レオ・ヘンリクセン

Leonne HENDRIKSEN, b.1949

スペインのサン・セバスティアン生まれ。

アムステルダムでアトリエを持つ。

旅により作家は思索を深め、相反する二つの要素が一緒になってひらめく物語を作る「二面性」を制作のテーマとしていた。

アトリエのサン・セバスティアン生まれ。

アムステルダムでアトリエを持つ。

